

## 地域計画特論(9) 精神医学の基礎(臨床心理との関係)

- アイデンティティ
- 個体発達分化の過程
- アイデンティティの心理構造
- アイデンティティの様態
- 日本におけるアイデンティティ
- アイデンティティの重要性

## ■アイデンティティという言葉

「アイデンティティ」という言葉は、もともとE. H. エリクソン(アメリカの精神分析学者)の用いたもので、臨床的な状態を記述する概念であった。

臨床的には、「同一性」「自我同一性」などの訳語用いるようになった。エリクソンが始めてもちいたのは、青年期の心理状態に関して起こる危機、「アイデンティティの拡散」(同一性拡散)  
<identity diffusion>⇒**くわしく後述する**

というわけで、「アイデンティティ」に完全に対応する日本語はないが、「自分は何であるかということ」(同一性)といった意味になる。

現在は、一般化した形で用いられており、いろいろなものに「○○アイデンティティ」というように用いるようになった。

## ■いろいろな「アイデンティティ」

**CI(コーポレート・アイデンティティ):**  
会社や企業のイメージを変え、新しく方向換えをしていくときに用いる戦略であり、「CI戦略」といわれる。会社の名前を変える、シンボルマークを変えるなど

**専門家アイデンティティ:**  
「教師アイデンティティ」「弁護士アイデンティティ」「医師アイデンティティ」など

**民族アイデンティティ:**ある民族の文化的・歴史的な独自性を強調するもの。「日本人アイデンティティ」など

**エリクソンのアイデンティティの意義は、古典的精神分析において、三歳程度までの精神発達で性格は決定されると考えられた。古典的精神分析の「還元主義」・・・同時に年齢に要求される社会的な課題を解決する精神的問題に関して、主体の発達としてとらえた。**

「ライフサイクル論」「個体発達分化論」(Epigenetic Development)

## ■個体発達分化の諸領域

	心理社会的危機所産	人格的活力	重要な対人関係の範囲	社会価値、秩序に関与した要素	心理・社会的行動様式	儀式化の個体発生	心理・性的段階
I	信頼感/不信任感	望み	母および母性的人間	宇宙的秩序	得る、見返りに与える	相互的認知	口唇期
II	自律性/恥・疑惑	意志	両親の人間	法と秩序	つかまえ、はなす	善悪の区別	肛門期
III	自発性/罪悪感	目的感	核家族の人間	理想的原型	ものにする(まねる)、らしく振舞う(遊ぶ)	演劇的	エディプス期
IV	勤勉性/劣等感	有能感	近隣、学校内の人間	技術的要素	ものを造る(完成する)、ものを組合せ組み立てる	遂行のルール	潜伏期
V	同一性/同一性拡散	忠誠心	仲間グループ、グループ対グループ、リーダーシップのモデル	知的、思想的な将来の展望	自分になりきる(あるいはなれない)、他人が自分になり切ることを認め合う	信念の共同一致	青年期
VI	親密性/孤立	愛情	友情における相手意識、異性、競争・協力の相手	いろいろな型の協力と競争	他人の中に自己を見出す、見失う		
VII	世代性/停滞性	世話(はぐくみ)	分業ともち前を生かす家族	教育と伝統の種種相	存在を生む、世話をする	世代継承的認可	性器期
VIII	統合性/絶望	知恵	人類、私のようなもの(自分らしさ)	知恵	一貫した存在を通して得られる実存、非存在への直面		

## ■個体発達分化の図式（1）



### [I]乳児期・「基本的な信頼⇔不信」

世の中を信じ、周囲の人を信じ、何よりも自分を信じて生きていかねばならない。この絶対の信頼感を基本的信頼とよぶ。これは、一番身近な母親や父親を通して得られるものである。生後すぐの運命的な出会いの中で決定的ともいうべき基本的信頼がつくりあげられる。<sense of basic trust>

⇒こころの生活になくなくてはならない決定的なもの。それがないとき、私たちの中には不信感が根づく。自分が信じられない。人が信じられない。



### [II]幼児期・「自律性⇔恥・疑惑」

たとえば躰(しつけ)などの外からの力を受け入れ、自分の衝動を統制する内的な枠組みとして内在化していくことが、自律性を築いていく上での中心的な仕事である。<self-control>

⇒外からの要求と自分の内からの要求とがバランスをとる。これができたとき、私たちは自立することができる。

## ■個体発達分化の図式（3）



### [IV]学童期・「勤勉性⇔劣等感」

いわゆる学童期の課題。内的な知的要求と外的な要求とのバランスとれているとき、私たちは学ぶことが興味深く面白い。毎日の勉強のなかで新しい発見があるとき、喜んで勉強をする。このような勉強のなかから内的に育ってくるのが「有能感」である。「自分なりにやっていたり力がある」「学ぶことは面白い」という感覚有能感は社会的に生きていく上で欠くことのできないこころの力となり支えとなる。

日本の場合には、子供たちの内的要求を超えて、どんどん要求されているので、義務感と苦痛のなかで受身的にやっているように見える。

「自分はずいぶんいい」「自分には能力がない」という劣等感、あるいは「他人に勝った」という競争心に根ざした優越感がこころの中に育つ。いずれも、自発的な学習ではなく、こころが充実していくよろこびにもつながらない。

## ■個体発達分化の図式（2）

うまくいかないとき、外の要求に答えられない恥ずかしさ、自分自身への疑惑、「いったい自分はどうなっているのか」「うまくやれていない」といった疑いが、こころの中に根を張ることになり、大変な苦痛である。



### [III]児童期・「自発性⇔罪悪感」

自分の衝動のままに動く、気ままに行動するというのではなく外的・内的な力が統制できる能力がついてから自分の要求を表現するようになることを自発性という。

自分が自分の行動の中心となり、外的・内的なバランスを保ちつつ行動できる状態(自主性ともいう)。アイデンティティの心の基礎もしこれがうまくいかないと、行動が規範を犯し、はみ出た行動となる。このとき、こころの中に起こってくるものは、「悪かった」、「失敗した」、「規範を犯してしまった」という罪の意識である。

⇒この意味の「罪の意識」は、日本人にはなかなかわかりにくい

## ■個体発達分化の図式（4）

### [V]思春期・青年期・「アイデンティティ⇔アイデンティティ拡散」

アイデンティティのテーマ:「自分とは何者か」「自分は何になりたいか」ということ。学童期までは学校の先生、父母、周囲の人などを理想的な人物として同一化し、自分もその人のように振舞ったり、考えたいしていた。

しかし理想的な人物にも気にいらなかったり、それと異なる自分に気づいたりしていく。この理想化と失望のプロセスを通して「本当の」「正真正銘の」自分とは何か、自分は何をやりたいかが問題となっていく。

「自分で自分をつくっていくこうとするうごき」

自分が自分の主人公になっていく過程、同一化(identification)、同一性(identity)への過程。



これには、大変なエネルギーが必要となる。最後の決定を自分が行うということは、最後の責任を自分がとるということ。人のせいにはできない、言い訳できない。このプロセスのなかで「自分である自覚」「社会的に役立つ自分」「思想的価値的な信念」を得て自分を獲得していく。

## ■ 個体発達分化の図式 (5)

### [VI] 成人期・「親密性⇔孤立」

男女の出会い、孤独を癒す力。アイデンティティの感覚を得てから、成人のこころを基本として、家族をつくりあげていくものとして成人期の親密性を築くための、心理的・社会的な自我の力が必要となり、重要となる。

そうでないとき、親密性を異性との間につくりあげることができない。孤立と孤独感に苦しむことになる。



### [VII] 壮年期・「世代性⇔停滞性」

世代性、つぎの世代への関心を高める。つぎの世代の確立にかかわっている。つぎの世代を支えていく子どもたちを生み、社会に役立つアイデアを生み、はぐくみ育てていくことへの積極的な関与をさしている。

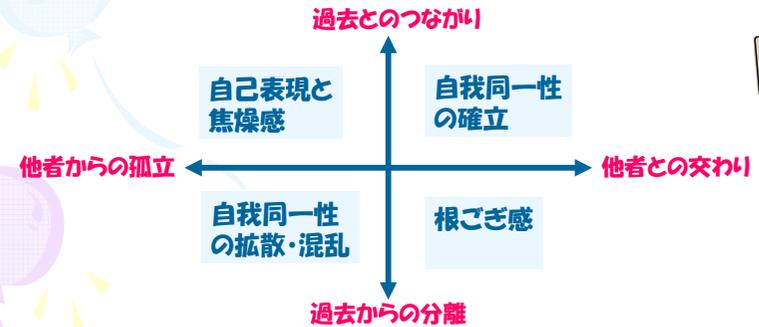
世代への関心がないとき、生活や社会的行動は停滞し、空しい自己陶醉になっていく。

## ■ 個体発達分化の図式 (6)

### [VIII] 老年期・「自我の統合性⇔絶望」

常に死に直面して生きることはなまやさしいことではない。死を受容しこれまでの生涯のすべてを自分のものとして受け容れる。肯定的否定的なものを統合して受け容れる。人類へ関心を持ち自我が統合された状態。「自我の完全性」(ego integrity)

そうでない場合、生きてきた尊厳がなくなり、一日もはやくオサラバしたくなる「絶望」の状態になる。



## ■ 心理・社会的危機とアイデンティティ拡散

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳児期	信頼 対 不信							
II 幼児前期		自律性 対 恥、疑惑						
III 幼児後期			自発性 対 罪悪感					
IV 学童期				勤労性 対 劣等感				
V 青年期	時間展望 対 時間拡散	自己確信 対 同一性意識	役割実験 対 否定的 同一性	達成の期待 対 労働麻痺	同一性 対 同一性拡散	性的同一性 対 両面的拡散	指導性と 服従性 対 権威の拡散	イデオロギー への帰依 対 理想の拡散
VI 成人前期						親密性 対 孤立		
VII 成人後期							世代性 対 停滞性	
VIII 老年期								統合性 対 絶望

## ■ アイデンティティの心理構造 (1)

### 1) 「時間的展望の喪失」(時間的展望/時間的展望拡散)

自分の内的な時間意識のあり方、過去にさかのぼり、これを認め将来の展望を持っている/反対に、時間的な見通しが失われ、希望して待つということがなくなる。

⇒ 五里霧中の状態、生活全体が刹那的、無気力になる。

### 2) 「自意識の過剰」(自己確信/自意識過剰)

アイデンティティ意識があり、社会の中で相対的な自分を認めている/その反対に、自意識過剰になり、誇大な自分や完全な自分を夢みて自己愛的になる。

### 3) 「否定的アイデンティティへの逃避」(役割実験/否定的アイデンティティ)

肯定的な社会的価値の追求に向かって努力している/その反対に、社会的に積極的な価値を否定し、むしろ反抗的な逆の価値を求める  
⇒ 非行、やくざ、自己主張のための特有の服装など

## ■アイデンティティの心理構造(2)

### 4)「活動の麻痺」(達成の期待/労働麻痺)

社会的役割をどのようにとるか見たもの。さまざまな社会的役割を実験的に試みる/反対に「自分は…である」という社会的役割の選択を回避し、選択を延ばし、社会的な参加を拒否する。

⇒偶然に起こってくることに身をまかせる生活になる

### 5)「アイデンティティの拡散」(アイデンティティ/アイデンティティ拡散)

アイデンティティ意識の状態について見たもの、自己のアイデンティティに確信を持っている/すべてが一時的、暫定的なものとしか見えない、すべてが可能であるように思われて、ひとつのことに自分が積極的に関与していくことができない

<後半で、主として議論する> identity diffusion

## ■アイデンティティの心理構造(3)

6)「性的アイデンティティの拡散」(性的アイデンティティ/両性的拡散)  
生物学的な身体的自己を受け容れる/反対に、生物学的な自分の性に対して積極的に生きていくことができない。

⇒ sexual identityに対して、gender identity(性別的役割)もある

### 7)「権威の拡散」(指導性/権威の拡散)

権威性・指導性という側面から見たもの。指導性を受け容れると同時に指導性を発揮することもできる。権威を身につけようと努力する/反対に支配・従属関係になるような組織に帰属するのを恐れ社会的に回避的な生活を送る。⇒意欲の喪失

### 8)「理想の拡散」(イデオロギーへの帰依/理想の拡散)

自己の信念・イデオロギーという面から見たもの。自己の信念は揺るがない。しかし頑なでもない/反対に社会的な信念やイデオロギーに関与することを恐れるか、現在の社会に呑み込まれることへの不安が強い。⇒考えが刹那的、見通しなく、関心がない

## ■アイデンティティの様態

アイデンティティ様態	危機	積極的関与
アイデンティティ達成	すでに経験した	している
モラトリアム	現在経験している	あいまい
予定アイデンティティ	経験していない	している
アイデンティティ拡散(A)	経験していない	していない
アイデンティティ拡散(B)	すでに経験した	していない

①

②

③

④-A

④-B

①: 苦しんだ過去の経験によって、アイデンティティをかなり確立している

②: 現在自分の行き方について模索の状態にあること

③: foreclosure: 原語、心理的な悩みや危機を経験していないが、職業やイデオロギーに積極的に関与しているタイプ。自分、周囲の期待と人生の目標、職業に関してスレがすくなく、予定された、予期された道を自分の道としてあるいている。価値観が通用しない状況で、途方にくれたり、混乱をする。

④-A: ほんとうに自分に直面したことがないので、自分が自分の責任で何かを選択しなかなければならない場合、どうしてよいかわからず混乱状態に陥る

④-B: 積極的関与を拒否するタイプ。すべての可能性を残すため、すべてに深く関与しない。他の可能性を捨てたくない「意欲喪失」のタイプ

## ■アイデンティティの問題

「学校恐怖症」⇒「登校拒否」⇒「スチューデントアパシー」の問題  
本来、中高校生の問題であるが、大学生の学業意欲喪失アパシーなども関係する。

問題の中心は強すぎる自己意識がみられる。かなり早い時期につくりあげられ、周囲からの見られかたや期待に応えるよう努力する。努力がうまくいくとき「自分はできるのだ」と自己誇大感をつくりあげる。

しかし能力より現実の要求が大きい場合、自己意識にキシミが生じはじめる。自己意識(自尊心)を維持する力は強大であり、実は能力が足りないが、「問題が悪い」「学校が悪い」「教師が悪い」「教科書が悪い」など現実を否定する方向にすすんでしまう。問題はつづくので、さらにエスカレートする。

異なるタイプの「アイデンティティの拡散」も知られている。  
(次回: 退却神経症)

## ■日本人のアイデンティティ

欧米では、「宗教観」の自覚が大きい。また「人との関係の意識」が基本的に意識されている。(言葉の問題、自我意識の問題)

⇒ 自分が自然と対峙しているように、人と対峙する。

一方で、日本人の場合、他人と区別された自分として十分独立的に主体として意識されないことが多い。

⇒ 伝統的な、決められた役割を選択の余地のまま受け容れていく(葛藤の少ない生きやすい生き方)

戦後の日本社会変化は著しい。社会的にも量より質の時代に移行している。

心理的には、与えられるものを受け容れる受身的な他者依存の姿勢から、ものを自分の好みに合わせて選び、積極的に探すと同時に、欲しくないものを拒否する「選択の姿勢」への移行となっている。

「**選択する**」⇒西洋近代化の個性の基盤

## ■選択の時代のアイデンティティ

選択の時代は到来したが、これまで「予定アイデンティティ」として定められていた役割や道を否定することを意味する。

日本人のすべてが「選択の方向」で努力を強いられるようになった。これからは、「何をつくるか」「何を求められているか」「自分は何をしたいか」を常に自分の内側に問いかけながら生活していかなければならない。

**予定アイデンティティ⇒選択するアイデンティティへの質的变化(このような背景で、アイデンティティ形成の混乱が生じる)**

<筆者意見>

アイデンティティという側面でも、多くの西洋的科学技術が無批判に導入してきたことの問題が発生しているのではないか。アメリカ型のモータリゼーションを導入したこと、大学の法人化とか教育システムの導入、業績評価システムの導入なども、形式的な導入によって社会的変化を期待しているものであるが、社会の複雑化にともなって当事者のアイデンティティの混乱は拡大するのではないか

## ■モラトリアム人間の登場

アルバイトなどを続け職につこうとしない、こころのなかでは、活発にいろいろなことを考えたいしているが、実際には定職につかない。(フリーター、ヤングアダルト、独身貴族、NEETなど)

⇒これらを「モラトリアム」という。

**社会的成人としての義務や責任を一時的に猶予するという意味保留の状態(様態の分類の③)**

<アイデンティティ人間>(まとめ)

- ①自分が何者であるか明確に定義して価値観を持つ
- ②内的な道徳律と自己コントロールがあり、自我理想に従って行動する人
- ③複数の社会的役割としての自分を秩序づける、自己と他者に対して行動に責任をもっている

## ■アイデンティティの重要性

<モラトリアム人間>

- ①社会的な存在として責任をとらない、お客様意識がある
- ②固定的な価値観に帰属しない、ひとつのことに忠誠的にならず可能性を残す
- ③明確なアイデンティティを確立し、「選択」するのではなく、「あれも、これも」というように対象に対して距離を保っておく
- ④社会への甘えを容認し正当化すること
- ⑤一時的な係わり合いを重視し、深い関係や社会的責任を拒否する。

**未決定のまま変わり身のはやいモラトリアム人間の方が、柔軟な思考と変わり身のはやさを要求する現代においては適応性が高いともいえる。**

しかし、ライフスタイルを背後から支えているのは、アイデンティティであり、「アイデンティティ人間からモラトリアム人間へ」というのではなく、両方が存在しなければならない。

<筆者意見>

就職がなくても平気で卒業できる、卒業してからは大学に連絡もしない、就職しても大した理由なく辞めてしまう…などの動向も現象論的には理解しやすい。しかし、アイデンティティの確立なしには、まともな社会生活はできないと思う。

## ■今回の参考文献

1. 鎌幹八郎:アイデンティティの心理学、講談社現代新書、1990.
2. 河合隼雄:日本人のアイデンティティ、創元社、1984
3. E. H. エリクソン著・小此木啓吾訳編:自我同一性 アイデンティティとライフ・サイクル、誠信書房、1973.
4. 佐治・福島・越知編:ノイローゼ 現代の精神病理 第2版、有斐閣選書、1984.
5. 大月三郎:第4版 精神医学、文光堂、1994.
6. E. H. エリクソン著・岩瀬庸理訳:アイデンティティ、金沢文庫、1969.
7. 小此木啓吾、モラトリアム人間の時代、中央公論社、1978.